

第2部 全国に広がるねぶた文化

パネルディスカッション「日本各地で行われている“ねぶた”大集合」

パネリスト 北海道斜里町総務環境部企画総務課 主事 川島 雄司 氏
群馬県太田市産業観光部商業観光課 主任 井上 真希 氏
埼玉県北本市市民経済部産業振興課 主査 加藤千鶴子 氏
神奈川県秦野市環境産業部観光課 主任主査 佐藤 剛 氏
コーディネーター (社) 弘前観光コンベンション協会 専務理事 今井二三夫 氏



今井 自己紹介を兼ねて、なぜねぶたをやるようになったのか、今の現状はどうなのか、そしてまた、そこから出てくるような問題も合わせながら発表していただきたいと思います。

斜里 北海道斜里町役場企画総務課の川島と申します。斜里町は北海道の北東の一番端、知床半島のオホーツク海側に面している町です。世界自然遺産となった知床を擁する町です。産業は農業、漁業、観光の三本柱、これが主な産業となっています。

弘前市と斜里町の間には友好都市の盟約が結ばれています。そのことがきっかけとなって、現在ねぶたが運行されるようになりました。盟約が結ばれたのは、昭和58年2月です。そして、同じ年に第1回目のねぶた運行が実施され、昨年、平成22年で28回目の運行を行うことができました。今から200年以上前の1807年に津軽藩士が斜里の警備に当たった際に冬の厳しい寒さ、そして栄養不足により100名の津軽藩士のうち72名が亡くなるという歴史がありました。この盟約の結ばれる10年前、昭和48年に津軽藩士殉難慰霊碑を建立し、慰霊祭を続けてきたことが契機となり、友好都市の盟約が結ばれました。

平成22年の祭りは、7月23日金曜日と24日土曜日に開催されております。毎年7月の第4金曜日、土曜日に運行されることとなっています。ですから、弘前と違いまして日にちが

毎年動いていきます。そして、このねぶた運行の一日目の日中ですね、午前10時から毎年、津軽藩士殉難慰霊祭が開催されているところです。

それではステージ上にスライドを映していただいているのですが、次の写真をお願いいたします。これは運行前の出陣式の様子です。場所は役場の庁舎の南側の駐車場です。ここが運行のスタート地点となっております。ねぶたの参加者についてですが、斜里町では14団体、参加者が2日間で延べ約2200名参加しています。斜里町の人口は約12800人となっておりますので、毎日町民の約1割がねぶたの運行に参加しています。このような規模ですので、役場の南側の駐車場に参加者が全員一纏めに集まることができています。これは斜里のねぶたの運行の良い所なのかなと思っています。この写真はそのステージ上から撮った写真となっております。

じゃあ、次の写真をお願いします。これはステージ上なんですけど、平成22年の運行に弘前市長さんとたか丸くんが参加して、出陣式を迎えることができました。

次の写真をお願いします。これは運行の様子の写真ですが、役場の駐車場を出て、スタートしたところです。先程も述べましたが、斜里のねぶた祭りは7月の第4金・土曜日に運行されています。弘前のねぶたまつりは8月1日から始まるんですけど、この時期は弘前の皆さんも大変忙しい時期に当たるんだと思います。このような中で弘前市の方々、観光コンベンション協会の方々、商工会議所さん、このような団体の皆様にも斜里町にお越しいただいて、運行されているということは町長始め、斜里町として本当に感謝しているところです。

次の写真をお願いします。これは運行が進んで、町の中にねぶたが進んできたところです。ねぶたの運行コースは、役場を出発しまして商店街の通りを通過して、斜里の駅前、そこでUターンして、同じコースを通過して役場まで戻っていくという約2キロのコースです。このねぶたが開催されている期間中は、知床夏祭りが同時開催されています。商店街のイベントが行われていたり、また弘前の物産展も同じ時期に開催されていますので、町の中が活気づいている様子です。

次の写真をお願いします。これが最後の写真になりますが、斜里町にある一番大きいねぶたの写真です。高さは8mあります。このねぶた本体も弘前市から平成5年に寄贈されたものです。このねぶた絵は先程対談された錦絵作家協会の三浦吞龍先生の絵です。このねぶたが斜里のねぶたの一番最後を飾るものとなっております。以上が斜里の運行の様子となっております。ありがとうございました。

太田 群馬県太田市役所商業観光課の井上と申します。太田市はスバルの富士重工の工場があるということで工業都市として発展した町であります。現在の太田市は平成17年3月に3町と合併しまして、新たに太田市となったわけです。

なぜ太田市でねぶたを行っているかということですが、先程お話しした合併した時にですね、その町の中の1つに旧尾島町があります。太田市のねぶたは元々その尾島町でやっていた夏祭りのものでした。旧尾島町の夏祭りという昔はですね、盆踊り、八木節、花火といったありふれた納涼祭だったんですけども、小さい町ということもあり、マンネリ化や高齢化、少子化等もありまして、お祭り自体の人手がだんだん少なくなってきました。こうした背景からお祭りを何とか盛り上げようという意見が多くなってきておりました。その時にですね、弘前市の青年会議所のメンバーの方が、弘前市で行われた講演会の中で群馬県尾島町に江戸時代、津軽藩の飛び地があったという史実を知りまして、是非その地に行ってみようということで昭和60年に尾島町を訪れるということがありました。それがきっかけとなりまして、弘前市と尾島町の交流が始まり、友好の印として昭和61年から尾島町の祭りにねぶたが登場することになりました。その後、尾島町でも独自にねぶたを作る企業、団体も増えまして、尾島のねぶたということで発展していき、平成7年から正式に尾島ねぶた祭りと言えまして、昨年で24回目を迎えることができました。

現在、どのようなやり方でねぶたが行われているかということですが、現在は毎年8月14、15日の2日間、尾島ねぶた祭りを開催しております。出陣団体は、大体15から16団体。参加団体の多くは企業が母体となっている団体で、弘前市のように市内の地区が中心となっているような団体はほとんどありません。開催場所については、太田市の中にある国道354号

の一部区間1.5キロくらいを通行止めにして、その中で運行しています。弘前市のねぶたまつりのようにスタート地点、ゴール地点が決まっている一方通行の運行ではなくて、交通規制をかけた1.5キロを往復するように運行しています。また、祭りの最後に、交通規制をかけた中央の部分に交差点がありますので、その交差点に各団体のねぶた、太鼓が集合して、ねぶた囃子の合奏というも行っております。ここが弘前市にはない、一番の違いだと思います。また、平成20年から太田市にも10尺ある大太鼓を作りまして、最近では、この大きな太鼓を見に来る観光客も増えております。

それでは、なぜねぶたがここまで続くことができたかということなんですけども、まずは弘前市と友好都市を太田市も結んでいますので、その様々な交流を行っている中で、その中心を担うねぶた祭りを太田の地で終わらせてはいけないということがあげられます。また現在、太田市の夏の風物詩の代表として、ねぶた祭りが大きな観光資源となっております。僅か1.5キロの道路に2日間で約15万人ぐらいの観光客が訪れております。こういった大きな観光客が集まるのは、太田市ではねぶた祭りだけです。また、地元の祭りに参加してもらうことで地元への愛を育て、市民同士の交流を深める役割も持っています。この地元愛や市民の交流が地元の商工業を育て、太田市の活性化に繋がるということを考え、毎年のようにねぶたを中心に頑張っております。また、20年近くやってきたということでねぶたの太鼓、笛の囃子がですね、少しずつではあるんですが、太田市に根付いてきています。太田市の新たな文化として認められつつあるねぶたを、太田市の伝統芸能と言われるまで発展させていきたいということもありまして、今現在、各団体を中心に努力しているところであります。

北本

埼玉県北本市役所産業振興課の加藤と申します。前にお出になった斜里さんですとか太田市さんは弘前市と縁のある町でございますけれど、北本市はこの弘前市とは何も縁がございません。そこでこのねぶたがどうして根付いたかということをお話ししたいと思っております。

平成3年に福島県会津坂下町と姉妹都市を結びました。この会津坂下町には人形ねぶた、組ねぶたがありまして、毎年8月にそのお祭りをしているそうです。それで、姉妹都市を結びまして、ずっと北本祭りもあったんですけども、その北本祭りは町の婦人会さんが流し踊りですとか、あとは地域の山車ですとか、それらを引いて北本祭りと呼んでいたんですけど、その姉妹都市をきっかけに会津坂下町の組ねぶたが北本祭りの中に入れていただきました。そうしましたら、それを見た北本の市民の方が「おおすごい」ということになりまして、じゃあ地域でも取り組めないかということで、観光協会が中心となって、その時の観光協会の会長さんがとても津軽に縁のある方だったんでしょうね、ねぶたをやろうということになりまして、会津坂下に匹敵するねぶたを2機作りまして。それが北本に初めてねぶたがお目見えすることになったきっかけになります。ただ、これまで北本のお祭りが11月に行っていましたものですから、北本に特徴ということで取り入れております。

北本市にはコミュニティというのが各小学校圏域で1つずつあります。8校ありますので8コミュニティあります。北本市というのは東京に近いものですから、北本の人口が約7万おりますが、その70%が他市から、他県から入ってきた人たちです。地元の人はほとんどおりません。そんな中で、皆さんがコミュニティで何か1つの目標を持って向かうとみんな仲良くできるということはわかったんですね。それから段々と発展しまして、北本もねぶたが今年で17回目になりますが、25機出ます。友好都市の太田市さんよりちょっと多いですね。私としては、なぜねぶたを運行するかっていうのは、歴史が浅いですから、弘前さんとは肩を並べられませんけども、地域の住民の絆ということをテーマに運行させていただいております。まあ、お話しするのは良くわかりませんよね、一度も見たことないですから。で、私としては北本市を紹介ということでDVDにまとめてきましたので、それをご覧になっていただきたいと思っております。よろしくお願ひします。

秦野

神奈川県秦野市役所観光課の佐藤と申します。秦野市は人口17万人を抱える中核都市でありまして、新宿、横浜から電車で約1時間ですね。北方には神奈川の屋根である丹沢山塊を抱えておりまして、神奈川県内唯一の典型的な盆地を形成しております。地下は天然の水がめとなっております。丹沢の山々から水を蓄えており、その水の水量およそ3億トンと言われておりまして、秦野盆地湧水群として環境省の方から全国名水百選に選ばれております。また、

歴史の宝庫でもありまして、とりわけたばこ産業につきましては非常に有名なものがありまして、そのたばこ産業の先代の礎を築いてもらったものが秦野たばこ祭りということで、現在行われております。

そんな秦野市がなぜ弘前ねぶたを運行するようになったのかというと言いますと、先程も言いました秦野たばこ祭り、こちらの催し物の中の1つでありますランタン巡行の中で弘前ねぶたを運行しております。たばこ祭りの名称を聞いて、こんな禁煙の時代に不謹慎なネーミングだと思われる方もいらっしゃると思いますけども、決して喫煙を奨励しているようなお祭りではございませんので、そのことを一言添えさせていただきたいと思っております。たばこ祭りにつきましては9月の下旬、土曜、日曜の2日間で行っておりまして、市内の保育園児、幼稚園児からレクリエーション協会のメンバーなど1000人を超える踊り手が一糸乱れぬ踊りを披露するたばこ音頭1000人パレードや木製の巨大な火おこし機を使って点火時間を競うジャンボ火おこし綱引きコンテスト、また神輿が街中を練り歩く神輿パレードなど40を超える多彩な行事を2日間で展開しており、今年で64回目を迎えようとしております。例年20万人を超える人出で賑わっております。その中でですね、60回の記念開催時ですね。今から数えること4回前になりますけども、青森ねぶたを1機招へいしました。その翌年ですね、61回たばこ祭りで、非常にお恥ずかしい話ではございますが、60回の目玉はねぶた、じゃあ次の目玉はねぶたにしようよと非常に安易な考えでですね、何のつてもなく弘前市の観光物産課様、弘前観光コンベンション様に秦野市で本場の弘前ねぶたを運行したい、何とかお力をお貸し願えないかと非常に無礼な願いを突然持ちかけたこと、わかりましたと非常に力強いお返事をいただくことができ、堅田ねぶた愛好会様をご紹介いただき、秦野に本物の弘前ねぶたを運行することができるようになりました。

さて、実際にはどのような形で運行しているのかと言いますと、実は秦野たばこ祭りでは数ある催しの中でも人気のあるランタン巡行というものが行われておりまして、弘前ねぶたもその巡行に混じって隊列の先頭で運行をしております。台数としましては、ランタンが10機、弘前ねぶたが1機、計11機がですね、市街地4キロを練り歩きます。残念ながらですね、本場の弘前とは違いまして、お祭りの実行委員会の方ですべて制作をいたしまして、当日市内の中学生が引手として運行するといったような形式を取っております。

なぜねぶたを運行するのか、その目的は何なのかと非常に大きな話なんですけども。本物をわが町でも見ることができる、触れることができる、これが一番の目的になるのではないかと考えております。弘前にねぶたを見に行きたくても行けない人、故郷が弘前の人、様々な思いを持っての方々に対しまして、少しでもその気持ちを叶えられる一助になれば良いなと思いつつながら、毎年弘前ねぶたの運行をさせていただいてる次第でございます。

今井 ねぶた運行されている中でどういう問題が起きてきているか、どういう課題があるか、それに弘前がどういう関わりをしたらいいのか、それをちょっとお話しいただいて、それから今後のねぶたのあり方についてどのようにお考えになっているか、こういったことをお尋ねしたいと思っております。

斜里 斜里町でねぶたが運行されるようになった30年近く前を振り返りますと、弘前市のように300年近く続いてきたねぶた文化っていうものは当然斜里町においては全くありませんでした。そういうことでゼロからのスタートとなりました。そのような中で祭りを続けてくることができたのは、例えばお囃子であるとか、また絵について弘前の方々が指導をしてくれたから、このことに他ならないと思っております。弘前の方が毎年斜里まで来てくださるんです。このことは本当に弘前の方々の温かさを感じているところです。

斜里町における課題ですが、常にそのようにずっと教えていただいているんですけども、当然弘前と同じように運行できているわけではないと思っております。なぜならば、私も弘前のねぶたまつりを見ることができました。その時に運行の整然とした様子であるとか、そういう所を見て、本当に感動しました。そういう所で斜里の運行と弘前の運行には差があるってことがわかりました。ですから、例えばお囃子であるとか絵を描く方の人材の育成ってことが斜里町において課題となっております。

次に現状のお祭りや斜里のねぶたの将来をどのような形にしていきたいかという点ですが、

ねぶたまつりが30年近く続きました。それで小さい時からねぶたを斜里で経験してきた世代が大体30代になりました。そのことによって、このお祭りが斜里の町民に定着しました。斜里ではイベントがあまり長く続かない傾向にありまして、これだけの期間続いて、人がたくさん集まるお祭りというのは知床斜里ねぶたのみとなっております。ですから、このお祭りをさらに続けていくことによって、また斜里に来ていただけるお客様にも満足していただけるようなお祭りになればと思っています。さらに加えますと、ねぶたを通じての弘前市との交流を進めていければと思います。例えばねぶたであれば、団体として青年会議所さんであるとか、弘前から消防団の方々が来ていただいたりとか、弘前の運行団体の方が斜里に来ていただいたりということで交流が図られています。また団体以外にも、それぞれ個人で斜里に来てくださる方もいらっしゃいます。また逆に斜里からも弘前のねぶたまつりを見に来たい団体で行かれる方もいますし、斜里のねぶたを見て、弘前のねぶたを見たいという方も大勢いらっしゃって、弘前には斜里からたくさんの方が行っていると思います。そのことに加えて、ねぶたを見たら、弘前のさくらを見てみたいと思う方、そういう風に広がっていくと思いますし、斜里のねぶたに来ていただいた方も、冬の斜里町に来てみたいと思っていただければ幸いです。

最後に、弘前市への依頼や協力してほしいことなどという点ですが、まず重要無形民俗文化財であるねぶたを北海道の斜里の地で運行できることは友好都市の縁から過分のご配慮をいただいたものであると思っています。さらに、斜里におけるねぶたの運行は斜里の地で殉難した津軽藩士の慰霊のための巡行という意味合いも込められています。そして、このねぶた運行は弘前市の皆さんの温かいご協力によって運行されてるものです。ですから、依頼と言いますか、今後とも斜里のねぶたを温かい見守っていただければと思っています。そして引き続き、斜里のねぶたについて、ご指導くださいますようお願いする次第です。

太田

太田市で行われているねぶた祭りでの現在の問題点、課題ですが、まず1つ目についてですが、先程運行は国道を通行止めにして行うとお話ししました。この通行止めをする区間の一部500mぐらいがですね、尾島商店街という商店街になってます。この商店街については街路灯も多く、夜になっても比較的明るいイメージがあるんですけど、そこを外れた残りの1キロになりますと夜になると薄暗い印象があります。そのためですね、お祭り当日も観光客がこの商店街に集中してしまうということがあります。この商店街にはですね、弘前のねぶたまつりと違い、露天商が数多く並ぶこととなります。1. 5キロくらいある運行区間のうち500mくらいの間に、観覧をする人、露天商で買い物する人、ねぶたの運行等に携わる人、そういった人が一堂に集まってしまいます。人で溢れる場所をねぶたが人をかき分けながら進むような形になっています。そんな状況ですので、ねぶたを運行する際に常に危険と隣り合わせの状態というのが大きな問題です。

2つ目の問題点として、後継者問題というのがあります。ねぶたが始まった当初中心となっていたメンバーがそろそろ還暦を迎えるような年齢になってきております。ねぶたが根付いてきたとはいえ、笛、太鼓を自分でやってみたいという人はまだまだ少なく、特に笛に関しては音が出しにくいということもあり、なかなか増えないのが現状です。弘前市さんとかですと、各町内とかで小さいことからそういった笛等に触れ合う機会等があると思うんですが、太田市ではなかなかそういう機会がないので、小さい頃から太鼓や笛に触れる機会を増やさなきゃいけないというのも課題になります。

3つ目は団体数が年々減少しつつあるということです。ねぶた祭りに参加する団体は企業が母体となっている団体がほとんどです。ですので、昨今のような不景気になりますとその企業の中の予算でねぶたに関する部分が削られたり、なくなってしまうということで、出陣を2日間あるうちの1日にするとか、出陣を辞退するという団体も見受けられるようになりました。企業による出陣に頼るのではなくて、各町内でねぶたを持ってもらったり、そういった形で住民中心となったねぶたを増やすということも課題ではないかと考えております。

最後に、日程の問題ってのも最近出てまして、毎年8月14、15日に行ってるんですが、この日がちょうどお盆ということで、当初この日に日程を決めた際には、地元を離れていた人たちがお盆の時期であれば、太田市に帰ってきて地元の祭りを楽しめるということで、この時期に設定したんですけども。逆に考えると太田市のねぶたは企業の団体がほとんどですので、

お盆休みになると、その企業に勤めていた方が地元に戻ってしまうということで、人出を集めるのが大変だという話が出始めました。14、15で固定するのではなくて、たとえば8月の第2土日にするとか、そういったような形で日程を考えてみてはもらえないかということで、いろいろ意見も最近出ています。ただし、商店街が中心となっているお祭りですので、お盆休みでないと商店の方々が積極的に携われないということで、大きな問題になっています。

次に太田の祭り、将来どのような形にしたいかということなんですけども、ねふたと観光客が入り混じったような運行をしておりますので、できれば弘前市のような形でねふたと観光客がきっちり分かれるような運行をしたいと考えてます。入り混じった運行が太田のねふたの良い所だと言う方もいらっしゃるんですが、そういった入り混じった運行ですとねふたや囃子方、特に太田市は太鼓の上に女性とか乗りますので、そういった方の写真を撮りたくて、笛を吹いている行列の間を縫って写真を撮りに行ったりですとか、露天商もやっておりますのでねふたの行列の間を縫って買い物に行くとか、そういった方もいらっしゃいますので、その辺を考えると大分危険な状況ですので、いい方法を考えてねふたと観光客をうまく分けられればと思っております。

次に、太田市の出陣団体なんですけども、基本的にねふたというのは本体、太鼓、前燈籠、前ねふた、そういったものがあるんですが、太田のねふたは本体と太鼓、または本体だけという団体がほとんどです。それですでの、各団体がですね、弘前市のように前燈籠から囃子までご招待の行列を作れるようになってほしいというのも私の願いであります。

最後に、現在二車線の国道を止めて運行しております。ねふたが有名になるにつれ、だんだん手狭になっているような気もします。太田市内のは四車線の国道などもありますので、その四車線の道路をねふたが勇壮に運行する姿を見てみたいなと個人的には思ってます。伝統を守りつつ、地域の特色も出すという難しい所でもあるんですが、その辺を良い方向に持っていければと考えております。

最後に弘前との関わりということなんですけども、もちろん今後も弘前市とは友好都市として長くお付き合いさせていただくことになると思います。そういった状況の中で、今後、友好都市を結んで、何十周年とか、そういったこともあると思うんです。そういった際にはですね、ぜひ弘前のねふたの団体が太田のねふたに参加していただいたり、逆に太田市の団体が弘前のねふたに参加したりとか、そういった交流もできればいいんじゃないかと考えております。今回、こういう機会が弘前市を含め、5市町が集まりましたので、何かの機会があれば、5市町が弘前のねふたに集まって運行できればいいんじゃないかなと思っておりました。せっかくこういう機会を設けさせてもらいましたので、いろいろと今後も交流していければと思っております。

北本

先程DVDを見ていただきましたので、北本のお祭りってこういうものかなという様子を分かっていただけだと思います。まあ、17回ということですが、本当に取り組み始めたのはこの3年です。やはり見よう見まねでやっていることがですね、長続きしないということが分かりましたので、3年前からですね、地域のコミュニティの方、会長さんですとか、昨年は市議会を弘前に行っていただきましてね、本物を見て、勉強してほしいということをお伝えしました。やはり独自というのは大事ですけども、本物を見て、それから独自になるというのは良いプロセスかなと思っております。まあ、この件に関しましては、弘前市さんのご協力がありまして、ここまでやってまいりました。これからも、皆さんの絆を深めていくということが北本の目的でありますので、これからもですね、本物を学び、北本の独自のコミュニティの絆を大事にしたお祭りをずっと続けていきたいなと思っております。

北本市はですね、1つ良いことに市の予算は1銭も使いません。地域のコミュニティが各1軒ずつお金を出し合ってこのお祭りを作り上げてます。あと足りない所は市内の企業さんにお願ひしまして協賛金を集めております。そういった意味では、市としてはおいしいお祭りですので、長続きさせたいなという気はいたします。市民の人にとってはそれは大変でしょうけども、自分たちの手で作り上げているお祭りです。これならば長続きするのではないかなと思っております。これからもよろしくご指導お願いいたします。

秦野

秦野に関しましては、ねふたが運行し始めて3回目ということであって、まだまだこれから発展をしていくものだと思っております。そういった中でですね、人、物、場所といった問題

があるんですけども、特に場所の問題につきましては、非常に大きな課題になっておりまして、ランタン、ねふたですね、こちらの制作、保管場所につきまして、実は市内の大型店舗の屋根付の駐車場をお借りして、短い時間、限られたスペースで作業をしているといった状況になっております。それ以外にもですね、警察当局との道路使用関係等、さまざま問題ございますが、こちらの場所というのがねふた運行に関しての最大の課題ではないかと思っております。

将来的にどのような形にしたいかということで、まだ始まったばかりということで、お祭りというのはですね、伝統は伝統としてしっかりと守っていき、新しいものを拒まず積極的に取り入れ、見るものと参加するもの垣根のないお祭り、市民誰もが気軽に参加することができるお祭りにしていければ良いのではないかと思っております。

ねふたに関しましても、現在は1機のみでの運行となっておりますが、将来は機数を増やすことなどして、そういうことができればお祭りに花を添えることができるのではないかと考えております。また、お祭りというものは子供からお年寄りまで地域の人が参加し、見に来ます。今まで見に来た人が、次は私も参加したい、そしてそれが受け繋がれ、この流れがいずれ伝統と呼ばれるものになるのではないかと思っております。参加してみたい、見てみたいと魅力あるお祭りを展開して、いつの日か秦野のたばこ祭りは凄いぞと言われる日が来ることを願っております。

最後に、依頼や協力ということなんですけど、私の場合は縁がございまして、ここ数年弘前ねふたの運行に参加の方させていただいており、非常に貴重な体験をさせていただいております。今後につきましても、ご指導ご鞭撻の方をお願いできればと思っております。